古松研

薄田泣菫

先日硯と阿波侯についての話しを書いたが、姫路藩にも硯について逸話が一つある。藩の家老職に河合寸翁といふ男があつて、頼山陽と硯とが大好きなので聞えてゐた。

頼山陽を硯に比べたら、あの通りの慷慨家だけに、ぷり〳〵憤り出すかも知れないが、実際の事を言ふと、河合寸翁は山陽よりもまだ硯の方が好きだつたらしい。珍しい硯を百面以上も集めて、百硯箪笥といつて凝つた箪笥に蔵ひ込んで女房や鼠などは滅多に其処へ寄せ付けなかつた。

同じ藩に松平太夫といふ幕府の御附家老があつて、

これはまた「古松研」といふ紫石端渓の素晴しい名硯を持合せてゐた。何でもこの硯一つで河合家の百硯に対抗するといふ代物で、山陽の賞めちぎつた箱書さへ添はつてゐるので、硯好きの河合はいゝ機会があつたら、何でも自分の方に捲き上げたいものだと、始終神様に願掛をしてゐたといふ事だ。

ある日河合と松平とは例のやうに碁を打つてゐた。河合は態と一二番負けて置いて、それからそろ〳〵、

「何うも今日は厭に負が込む。こんな日には賭碁でもしたら気が引立つかも知れない。何うだい、貴公には古松研、拙者には沈南蘋の名画があるが、あれを一つ

賭けてみようぢやないか。」

と切り出してみた。

松平は二つ返事で承知をした。

「お気の毒だが、沈南蘋は拙者が預くかな。」

などと戯談を言ひ言ひ、また打ち始めたが、かねぐお賽銭を貰つてゐる氏神様のお力で、河合は手もなく松平を負かして、名高い「古松研」は到頭河合の手に渡つて了つた。

維新後河合家の名硯は、それぐ百硯篳笥から飛び出して知らぬ人に買ひ取られて往つた。当地の八田氏の売立会に出てゐた「金星銀糸硯」なども、その一つ

だが、例の「古松研」は今は神戸の某実業家の手に入って、細君以上に可愛(かあい)がられてゐるといふことだ。

底本：「日本の名随筆　別巻９　骨董」作品社
１９９１（平成３）年11月25日第１刷発行
１９９９（平成11）年８月25日第６刷発行
底本の親本：「完本　茶話　上巻」冨山房
１９８３（昭和58）年11月発行
※底本の親本で「河合寸翁（かはひすんをう）」に付けられた編注「〔道臣（ひろおみ）〕」は、削除しました。
入力：門田裕志
校正：高柳典子
２００５年５月４日作成
青空文庫作成ファイル：